

## 19世紀フランス市民の服飾と衣生活

### ——文学作品にみる——

菅原 珠子

フランス革命を経て、19世紀前半に服装の階級的差違は少くなるが、それに代って経済力や社会的地位、個人の好みが服装に反映する。帝政時代の新貴族や、王政復古により再び力を得た旧貴族、経済力のある市民たちがモードの新しいリーダーになったという。またモードはパリに生まれ、地方都市はパリに追いつくことを目的としていたようである。当時のモード雑誌には、名前の通ったパリの服装専門店の品々を紹介する記事が多く、そして後世、それら最先端のモードを綴ることによりモード史が語られていることも多い。しかし一方で、一般市民や地方在住の人々の服装や衣生活についての疑問がある。そこで風俗描写の優れた写実的作品、バルザックを初めスタンダール、フローベルの小説にみられる登場人物の服飾を通して、19世紀前半の種々の人々の服飾を探ってみた。作品の登場人物はフィクションが建前であるが、その風俗については、作家の鋭い観察眼により当時の読者が納得するだけの真実性があり、加えて当時の人々の服飾に対する考え方も随所にみることができる。特にバルザックの作品は、彼が自ら「服装は社会の表現である」、「作品によって多くの歴史家が書き忘れた歴史、すなわち風俗の歴史を書く」と述べているように、<sup>(1)</sup> 作品中の人物はあらゆる地域や階層に及んでいる。また彼の服飾の記述も正確であるという研究もある。<sup>(2)</sup>

19世紀前半の男子服は、当時のモード画やモード記事によると、前世紀以来の上着、アビヤフラック(habit, frac)が次第に、ルダンゴット(redingote)にかわり、下半身着もキュロット(culotte)からパンタロン(pantalon)にか

わってゆく。アビやキュロットは礼装として残っていたが、世紀半ばに近づくにつれ、それも変化する。これらの上着類の内側にはジレ (gilet) とシュミーズ (chemise)、胸もとにクラヴァット (cravate) がつけられるが、特にクラヴァットの結び方は変化する。さらに帽子 (chapeau) や靴下 (bas) と靴、外衣としてパルト (paletot) やパルドウシュ (pardessus) がある。モード雑誌の記事によると、これらの衣服は、流行のシルエットやデザイン、季節にあわせた生地、よい仕立てが求められ、さらに日中の外出や、夜の盛装、略装にもとづく違いがみられる。<sup>(3)</sup>

バルザックの『ゴリオ爺さん』や『幻滅』などに登場する1820年頃の洒落者 (dandy) は、日中は優雅に胸を締めたルダングット、上等の汚れのないブーツ、白く清潔なシュミーズ、白い手袋、夜の盛装にはアビと白いジレ、黄色い手袋をつけ、その上、有名な専門店の品や仕立てであることが条件であるとされている。女子服はローブ (robe) が中心だが、それにショールやスカーフ (châle, fichu)、帽子類 (chapeau, bonnet)、髪飾りが加えられ、男子と同様に、名高い店の上等の生地や仕立て、季節に合った品々、凝った装身具、洗練された着こなしが望まれている。

## I

先ずパリ市民男子の服装をみることにする。

バルザックの『セザール・ピロトー』は、パリの展型的な中産階級に属する善良な香料商人ピロトーの物語であるが、彼の1820年頃の服装は次のように書かれている。<sup>(6)</sup>

「彼の服装は、彼の習慣と外貌とにつり合っていた。どんなことがあっても、彼から白モスリンのクラヴァットを取らせることは出来なかったであろう。そのクラヴァットの、彼の妻か娘が刺繍した角は、いつも彼の首の下に垂れていた。きっちりボタンどめした白ピケのジレは、相当に突き出た腹の下まで下っていた。なぜなら、やや太鼓腹だったからである。彼は青いパンタロ

ンと黒絹の靴下，リボンつきの靴をはいていたが，そのリボンの結び目はよくほどこけていた。いつも大きすぎるオリーブ色がかった緑色のルダンゴットと，<sup>ツバ</sup> 罎広の帽子は，彼にクエーカー教徒のような風貌を与えていた。日曜日の夜会には，絹のキュロットと金の止め金のついた靴と，いつものジレをつけたが，その時には，ジレの両端を少し上げて，髷のついたジャボ（胸髷飾り，jabot）の上の方をのぞかせて見せた。栗色の羅紗地（drap）のアビは，裾がゆったりとし，垂れが長かった。」

この文章の中の「妻か娘の刺繍……」は，彼が家族に愛されている真面目な夫であることを表わすが，同時にまた，やや時代遅れを意味する。バルザックの『幻滅』には，1821年アングレームからパリにきた青年リュシアンが，自分のように昼間から白いクラヴァットを締めているのは老人だけであり，その上，妹が丹精こめて両端に刺繍したクラヴァットと同様なものを店の小僧がしめていた，と嘆く場面がある。<sup>(6)</sup> 「大きすぎるルダンゴット」というのも，当時のダンディ達が，体の線を優雅に表わすダンゴットの姿で描かれていることと対照的である。しかし，ピロトーは日曜日の夜には絹のキュロットとジャボのついたシュミーズを着けることや，さらに「レジオンドヌール勲章の受勲の際，黒絹のキュロット，絹靴下，紺青色の新しいアビを着ける」という記述があり，<sup>(7)</sup> 当時の上流階級の人々と同様に，あるいはそれ以上に，T. P. O. に彼なりのしきたりを決めている。

同作品の人物の一人，ピロトーの妻の伯父で元金物屋のピルローは，隠退してつつましい生活を送る善良な市民で同様な服装である。「性質の善良さが美しい外貌となってあらわれているような人で，服装と性行，頭脳と心臓，言葉と思考，すべてが彼のうちにおいては調子を保っていた……彼の服装は簡単でそれにいつも同じだった。常に青ラシャのルダンゴットとパンタロン，ルーアン木綿のジレに白いクラヴァットといういでたちで，はきやすい短靴（souliers）をはいていた。そして休祭日には金ボタンのアビを着た<sup>(8)</sup>」。もう一人，商人の例を挙げる。ピロトーの若い頃の主人，元香料商のラゴンである。「せいぜい160cm位しかない小男で，まるでクルミ割りみたいな顔をし，目

と、とがった頬骨と、鼻と顎しかないような顔だった。……彼は紺青色のアビ、白いジレ、キュロットに絹の靴下、金の止め金のついた靴、それに黒絹の手袋といったいでたちだった。いかにも彼らしい性格が一番よく現われたかっこうというのは、彼が帽子を片手に町を歩いてゆく時のそれだった。貴族院の使者か、王宮の門衛といった、とにかく自分はいっこうに価値のない人間なのだが、なにかしらの権威のそばにあつて、その反映を受けて威儀をつくらっているという性質の人間の風采<sup>(9)</sup>をしていた。」このような描写をみると、バルザックは、パリの街に住む何人かの実在の人物と服装を細かく観察し、作中の人物に採用していることが想像できるのである。従って服装もまた、当時の人々の忠実な写生である。そして、服装と人柄も関係があるとみえる。

1821年頃を舞台とするバルザックの『幻滅』には、パリのダンディ達の姿が描かれているが、一方でこんな市民もいる。出版者ドグローは「大きな四角い垂れのついた黒いアビを着ていた。ところが当時の流行は燕尾(queue)のついたフラックが普通だった。ジレは種々の色の格子縞の粗末な生地であり、そのポケットから鉄の鎖と銅の鍵がぶらさがり、それが太くて黒いキュロットの上でゆれていた。懐中時計は玉葱ほどの大きさがありそうだ。このような服装に加えて靴下は鉄灰色のラシャまがいのもの、靴は銀の止め金で飾られた古ものをはいていた。老人は帽子もかぶらず、むき出しの頭を半白の髪毛が飾っていたが、その髪が詩的なほどまばらである。……アビ、キュロット、靴などの点では文学の教授といった風采、ジレ、懐中時計、靴下では商人くさかった。」

日中からアビ、太く黒いキュロットとは、19世紀初頭の服装である。社交界以外の年輩の人には、彼らの若い時代の服装を守り続けている例が多いし、絵画や版画にもその様子がうかがえる。1820年代初期に配布されたというマルレの版画<sup>(10)</sup>には、その頃のパリの様々な市民の姿が描かれているが、労働の場合を除くと、男子はフラックまたはダンゴットとパンタロンの服装が多い。

少し年代が下るが、やはり古風な服装の主を挙げる。1844年に1806年の流

行を守り、帝政時代を思い起させる人物として描かれている、老人ポンスがいる。「ひからびてやせこけたこの老人は、白メタルのボタンのついた、緑がかった色のアビに、淡褐色のスペンサー（spencer）<sup>09</sup>を引っかけているのである。……1844年にスペンサーを着ている男、まるでナポレオンが2時間ばかり復活されたようなさわぎではありませんか。……この男は、金持がよくそんな身なりを真似したがるが、落ちぶれたてまえ不如意の上流紳士といったふうをしていた。短靴をかくしているゲートル（guêtres）は親衛隊のそれにかたどったものだが、おかげでしばらくのあいだ同じ靴下（chaussettes）をはいていられることは請合いである。黒ラシャのパンタロンは、ところどころすりきれて赤く光っている。そして仕立ての具合は申すに及ばず、パンタロンの折り目の白っぽい線やピカピカの筋からみて、このパンタロンを買ったのは3年前ということがわかる。衣服（vêtement）がだぶだぶしているので、体のやせているのが容易に眼につく。……同じ黒ラシャの折返し襟つきジレ（gilet à châle）に白いジレを重ね、そのまた下には三番目として赤い編物のジレの縁がかがやいている。……白モスリンの大きなクラヴァットのようすぶった結び方は、1809年頃の美女を迷わそうとしたある洒落者（Beau）が発明したものだが、そのクラヴァットが顎の上にくっと突き出ている。……この、スペンサー最後の着用者は、帝政時代のシンボルを着こんでいるばかりでなく、その上に彼の三枚重ねのジレ……」。

このような服装の男は、かつてフランス学士院からローマ大賞を貰った著名な作曲家で、この時は、場末の劇場のオーケストラの指揮と音楽塾の教師を内職とする人物として描かれている。バルザック自身が指摘しているように、スペンサー、ジレの三枚重ね、大きな結び目のクラヴァットは、19世紀初期の肖像画などにみられる。アングルの「リヴィエール氏の肖像」（1805）と題する肖像画は、襟もとがクラヴァットとシュミーズの襟でふくらみ、黒地ブラックと薄色のキュロットをつけている。この人は帝政時代の政府の要人という。またダヴィットの「俳優ヴォルフの肖像」（1819～22）には、赤いジレと横縞の柄のジレの重ね着がみえる。老人ポンスの服装の様子がしの

ばれる。アングルの描いた「ベルタン氏の肖像」(1832)は、バルザックの作品にもよくその名の出てくる、「ジュルナルデバ」紙の創始者ベルタンの姿で、濃茶系のルダングットとジレを着け、当時の展型的な市民の服装を表わしていると思う。

パリの中流市民男子の服装の例をみてきたが、さらに下層の人々、やっと生きていようなパリの人たちの姿も挙げておく。バルザックの『いとこベツト』の主要人物、ユロ男爵は女遊びの末、1840年代初め財産を使い果たし70歳になって3年間も家族からかくれ、貧民街に住んでいた。かつては髪を染め、コルセットで体型を整えて、年をとってもダンディ振りを見せていたのだが、「髪<sup>64</sup>の毛は真白で、顔はしわだらけ、寒さのため鼻を真赤にし、目の粗い布製の靴、色のはげたアルパカのルダングット、手編のジレ、黄色くなったシュミーズを着けていた。」また『ゴリオ爺さん』にもヴォケー館という安価な下宿屋に住む、おちぶれた人々の様子がよく描かれている。「男たちのつけているルダングットは、怪し気な色に褪せ、みやびな巷なら道端に転がっているような靴を、それぞれはいて、下着 (linge) はすりきれ、衣服類 (vêtement) はもう魂しか残っていなかった。」<sup>65</sup>かつてはそれなりに地位や経済力のあった人は、おちぶれるとかつての古い衣服を、すり切れても汚れても着るしかなかった様子がうかがえる。

同様に貧しくとも青年の服装は少し違う。『ゴリオ爺さん』の主人公ラストニャックは、同じヴォケー館に住んでいるが、地方貴族出身の学生で、親の乏しい仕送りのため検約した生活をしている。「平常は昨年の衣服をすり切れるまで着通していたが、それでもたまには高雅な青年のように着飾って外出することなどもあった。いつもは古いルダングットに汚ないジレ、色褪せた粗末な黒いクラヴァット、それも学生式に結びのだらけた代物、パンタロンもそれにふさわしいような安物、ブーツも底革を張り替えた捨物をはいていた。」<sup>66</sup>この学生のような服装の人物はバルザックの他の作品にも描かれているので、当時の展型的な青年の服装であろう。

女子の例を少し引用する。『いとこベツト』のリスベツトは、自分の境遇

に不満をもち、服装に気をつかわない老嬢である。親せきに上流階級の人もいるという身ながら、通いのお針婆さんという格好であった。つまり「黒みがかかった葡萄色のメリノラシャのローブで、その裁ち方や飾り方は帝政時代のようなもの。麦わら帽は青いサテン地の花結びがあしらわれ、中央市場の女商人がざらにかぶっているようなもの、短靴も路地裏のケチな靴屋の作った山羊皮のもの<sup>07</sup>」であった。また同書の中で、パリの貧しいが美しい16歳のお針子が最高に装った時「1 m75センチの粗末なサラサ (indienne) のローブに、刺繍のあるコルレット (collerette, フリル風飾り襟) をつけ、釘なしの革の短靴に、29スーの手袋をはめていた」と書かれている<sup>08</sup>。手作りの精一杯のおしゃれである。というのは、この少女は絹物商人の注文をとり、絹地刺繍で一日16時間働き、一日16スー稼ぐという生活をしているというのだから<sup>09</sup>。前述の、『ゴリオ爺さん』の中のヴォケー館に住む貧しい人々、その女性について次のような描写がある。「女たちのローブもまた流行おくれの染直しや色褪せたもので、古いレースは繕いだらけ、手袋も使い古して垢光りし、コルレットは万年褐色、肩かけ (fichu) といったら総体がほぐれかかっていた<sup>09</sup>。」この女性たちも同じ下宿屋の男たち同様、昔の衣服を着続けていることがわかるのである。

下層階級の、生活にも困る人々の服装は別として、パリに住む中流市民と、若い洒落者や貴族との服飾の相違は、流行を気にするか否か、服装への気くばり、名の通った専門店で購入するか否か、などにみられるようである。前述の『セザール・ピロトー』の小説の中の、ピロトーの受勲祝賀の舞踏会に集まった人々の服飾描写は、さらにバルザック本人の服飾観をよく表わしている。

「貴族階級、財政界、官界をそれぞれ代表しその輝かしい美しさ、服装、立居振舞いが断然この夜会のなかで光っている三人の女性を除いて、他の婦人たちはみな不器用でかたいお化粧が目立った。それは何かこう金のあることを見せびらかしているような化粧法で、多くのブルジョアの奥さんやお嬢さん達に、誰も彼も区別ないような一様の風貌を与えるものである」というの

である。そして例えば葉種商の夫人は「ターバン型帽子をかぶり、金で縫取りした紅色のどっしりしたローブを着、尊大な態度にちょうど似合ったお化粧をして踊っていた。」そして、ビロトーの妻と娘もこの日のために新調した晴着を夫から贈られる。妻は、「レース飾りのついた桜桃色の流行のローブ」。娘は、「白のクレープのローブに紅いバラを飾り、白バラの髪飾り、肩に肩かけ (écharpe)」を着けた。「ブルジョア階級の婦人たちはお化粧に苦勞し、今日ぞ着る日ぞとめかしこみ、忙しい自分達の生活にとって舞踏会は千載の一遇だという気持ちをあらわに見せた喜びを率直に示していた。ところが上流階級のそれは、今日も明日も同じだというふうで、特別に今日のために着飾ったという様子もみせず、珍しい高価な装飾品を身につけた自分の姿をほれぼれと眺めることもせず、またお化粧の効果についても、別段不安に感じていなかった」。一方、男性も社交界の状況をよく知っていた銀行員や若い洒落者、一部の役人を除くと大変こっけいだったという。特に家主の貧相な男は、次のように説明されている。「戸棚の中に長くしまっていたため黄色くなった上等の麻地のシュミーズを着、浮彫を施した青味がかった玉石のついた針でとめた長いレースのジャボ (jabot, シュミーズの胸襷飾り) をこれみよがしにふくらませ、絹地の黒くて短かいキュロットをはいていた。このキュロットは、彼が大胆にも自分の体の重みを全部のせかけているやせた脚の形をあらわにみせていた。」中流やそれ以下の市民の、無理なおしゃれをバルザックは皮肉に描いているが、それは次に述べる地方の人々に対しても同様である。

## II

パリにいろいろな階層の人々が住み、その服飾も多様であるように、地方都市にも様々な人と服飾がみられる。バルザックによると、人の生活環境や経済力や人柄が服装に反映していると考えられるのである。

『老嬢』には、地方都市、アランソンの小貴族や聖職者、経済的に豊かな市



民の集まる、1815年頃のサロンの情景が描かれている。多くの年輩者は贅沢やお洒落には無関心で、自己の偏見に固執し、パリから来た流行は、長い間検討しないと用いない、という。しかしサロンの女主人で財産のある老嬢に恋する男たちは身なりを整える。一人の若者は「ジャボつきのシュミーズとエルブフ産のラシヤの緑のアビを着けて人より目立つ」ことを母親から教えられる。年輩の一人の洒落者も新しい服装をとり入れて「下着に細心の注意を払い……生地の上等なことと汚れない白さを第一とし、……金ポタンのついた栗色のアビ、金の留金のついたタフタ地の細目のキュロット、縫取のない白のジレをつけ、……顔をひきたてるための入念な化粧をした」。これらの服装は土地の年輩者には受け入れられずとも、目当ての女性の気をひくための努力であった、と書かれている。この物語の老嬢、<sup>63</sup>コルモン嬢は、彼女の後見人の伯父の知人の貴族の姿をみただけでとりのぼせてしまう、という場面のあることから、バルザックは、地方の人々がパリや貴族に憧れている心情を描こうとしたが、それはまた彼自身の考えかも知れない。

同様な情景は、『ウジェニー・グランデ』にもみられる。ソーミュールに住む吝嗇な葡萄造グランデの一人娘のウジェニーは、パリの若者である従兄の来訪の際、そのパリ風の洒落者らしい服装と容姿に強烈な衝撃をうけ、熱烈な恋心を抱く。また、グランデ家のサロンの常連の一人、町の名士グラスサンサンの夫人は、若々しく色白で、「サロンの中では身なりが整っている方であるが、彼女は流行品をパリからとり寄せ、ソーミュールの町にお手本を示し、時々、夜会を開き、……そのお化粧ぶりも、バラ色の羽根飾りもみずみずしかつた」。<sup>64</sup>経済的に余裕のある場合、気のきいたお洒落をしようとする場合、多くはパリの流行を意識している。しかし全く無関心に自分なりの服装を守り続ける者も少くないということであろう。

『幻滅』には、アングレームの富裕階級の人々が集まる、バルジュトン夫人のサロンの様子が描かれている。1821年、貧しい青年リュシアンは、詩人としての才能のゆえに、この夫人の夜会に招かれる。青年の妹は「とっておきのルイ金貨を数枚とり出し、町で一等の靴屋で極上の短靴と、最も名の通っ

た服屋で新しい服を買う。その上、兄の一番よいシュミーズを自ら洗たくして襦のあるジャボを縫いつける<sup>63</sup>。その新調の「黄色いボタンのついた青いアビと、南京織の黄色のパンタロン」をみて、リュシアン<sup>64</sup>の友人は、彼のすらっとした容姿と上手な着方を、「貴族にみえる」とほめている。

サロンの常連で野心家のシャトレ男爵は、かつての政界の生活経験に自信があり、如才ないが横柄な態度で、上述のリュシアン<sup>64</sup>の服装をジロジロ眺め、自分のと較べてみる。彼は「眼をあざむくばかりの白いパンタロンをはき、止め紐 (sous-pièds) できちんと折目をつけて、足の甲のところではぼっていた。上等の短靴に、スコットランド風格子縞の靴下、白いジレの上に鼻眼鏡の黒リボンが垂れている。黒いアビはパリ風の裁断と型によって目立っていた。今までの素性が物語っているような、全く色男気どりの風采だ。が、寄る年波はあらそえず、すでに太鼓腹が少し突き出て、粋な姿 (élégance) とは<sup>65</sup>どうも見えなくなって来た。」

シャトレとリュシアン<sup>64</sup>の二人が、恋心をもつ女主人バルジュトン夫人は、「色もよう<sup>66</sup>のモスリンのローブ、紗の肩かけ (écharpe)、宝石のきらめく頸飾り、ターバン風の帽子という、凝った意匠の輝くばかりの服装で現われ、その舞台に出るような身なりがリュシアン<sup>64</sup>を魅了した<sup>67</sup>」。しかし物語の中で、のちに夫人のこの美しい着こなしも、パリの社交界では色あせて見えることを、リュシアン<sup>64</sup>は経験するのである。

夜会の招待客の一人、革命時代の青年貴族で当時45歳のシャンドールは、「クラヴァットはいつも喧嘩している二つの剣尖のように一方は右耳の高さにはねあがり、片方は十字勲章の赤い略授の方へ下っていた。アビの燕尾 (basque) はひどくそり返っていた。ジレの胸がひどくはだけ、ふくれあがって硬い糊をつけたシュミーズが、金銀細工をやたらに施したピンでとめてあるのが見えた。要するに服装全体が大げさで漫画に似た感じ、見なれぬ人なら吹き出さざるを得ない<sup>68</sup>のだった」。その他に、芸術家気どりの二人の男たちは、「田舎風のぞんざいな風采をして珍妙だった。よれよれのアビはちょうど二流劇場で結婚式に招かれた上流社会人に扮する端役連のような感じ」

であり、彼らの妻たちは、どちらも「肩かけ (fichu)、装身具、異った色の調和などに気をつけていて、パリ女らしく見せたくてたまらず、そのため家庭のことはそっちのけにしていたから、何もかも具合が悪くなっていた。経済的に仕立てたローブに人形のようにきっちりと身をくるんで、とっぴな色彩の展覧をやっている」という。また田舎の貴族の一人は「態度や服装をみると全く社交界の古びた魔物といった感じで、アビを着て窮屈がり、手のおきどころを知らず……<sup>69</sup>」と描写されている。このように『幻滅』にみるアングレームの上流階級では、1821年の夜会の場面で、男子は既にパンタロンを着けているが、前掲『老嬢』のアランソンのゴルモン嬢のサロンでは、数年前とはいえ、パンタロンではなくキュロットであった。モードの上からいうと遅れている。年代と、地方と、階級の差が明らかであるが、バルザックが意識的に書いたとも考えられる。

地方とパリの服装の相違は「流行遅れ」ということ以外に、経済的な面もあったとも言える。『田舎ミュージズ』のなかに、女学校時代の二人の友人が、結婚後再会する場面がある。地方貴族と結婚したベリー州境近くのサンセールサンセールの町に住むボードレ夫人は、「一年に一枚のローブの新調、二年に一度の帽子の新調でがまんし、化粧代も検約する。周囲の人々にほめられれば衣服も安物で間にあわせる。一方、パリの貴族と結婚した友人は、ボードレ夫人の館を訪れた時、美しく装い、沢山の衣裳箱と一人の小間使を伴ってきた。彼女は衣服代に年6,000フラン使うが、それはボードレ夫人の家計の額に相当した<sup>69</sup>」という。また、スタンダールの『赤と黒』の主人公ジュリアンは、ヴェリエールの町の材木商の息子だが、その才能をかわれてパリの貴族の家に書生として働くことになった時、新しいシュミーズ2枚を用意していたところ、傭主から「あと22枚シュミーズを買うように」と、給料の前払いを受けた。<sup>61</sup>庶民と上流階級の人、地方とパリの違いがここにもみられる。

バルザックの『ウジェニー・グランドエ』の葡萄造グランドエは、極端に生活を切りつめて財産を貯えている。物語では1818年頃に1791年以来、同じような格好であったという。すなわち「頑丈な短靴を革の紐で結んでいた。冬で

も夏でもラシヤまがいの毛の靴下と、銀の止め金つきの栗色の厚ぼったいラシヤの短いキュロットをはき、黄色と茶褐色の縞柄のビロードのジレを着てきちんとボタンをかけ、大きな垂れ (pans) のゆったりした栗色のアビ、<sup>63</sup> 黒いクラヴァットにクエーカー風の巾広い帽子といういでたちであった。前述のセザール・ピロトーは、14歳の時 (1790年代初めに当る) に、ルイ金貨一枚をもってパリに出て来て香料商ラゴンの店の小僧になったのだが、その時は「鋏を打った靴に、キュロット、青靴下、花柄のジレ、百姓風のヴェスト (veste de paysan)、質のよい布で作った3枚の厚手のシュミーズ」と<sup>63</sup> という服装である。フランス革命頃までは、男子の下半身着はすべてキュロットで、身分や経済力の差は素材や仕立ての違いであった。1790年代にピロトーがキュロットを着けていたのは当然であり、一方、グランデは、自分の若い頃の服装をそのまま守っていたのである。またヴェスト (veste) は前述の『赤と黒』のジュリアンにも登場している。『赤と黒』は「1830年代史」という副題がついている通り、服装もその当時のものといえる。ジュリアンは前述の、パリにゆく前、郷里で20歳の頃、先ず町長レーナルの子供たちの家庭教師になるのだが、初めて町長宅を訪れた時、「真白なシュミーズを着て、<sup>64</sup> 粗い紫のカシミヤの、小ざっぱりしたヴェストを手にして」いた。レーナルは「あんたのヴェスト姿を子供たちや召使いどもに見られるのはまづい」と言って、とりあえず自分のルダンゴットを着せ、服地屋にジュリアンを連れてゆき、黒い服を買い与える。さらに服地屋で黒いアビの揃い (l'habit noir complet) を仕立てさせた。<sup>63</sup> ヴェストは、この時代まだ農夫の日常服としても残っていた袖つきの上着のことである。アルル地方には19世紀半ば頃まで「jargo」という大きなヴェスト (grosse veste) や農夫用の青いブラウス (blouse bleue) が残っていた。……1835年、ユーゴー (Hugo) によれば、バス・ザルブ地方 (フランス南東部の旧称) の男たちは、袖口飾りのある袖つきのゆったりした丈長のアビをつけ、ヴェストも丈長で、膝を掩う位のキュロットをつけていた」と<sup>64</sup> という。これらのことから当時ヴェストはフランスの農夫の服として各地方に残っていたと思われる。

### III

以上、地方都市の種々の服装を、パリの服装と比較しながらみてきたが、さらに地方の人々のお洒落の様子とその感情をみてゆく。フローベルの『ボヴァリ夫人』のボヴァリとエマのトストでの結婚の披露宴に集まった人々の服飾の描写を引用してみる。

「ボンネット (bonnet) をかぶった女たちは町で流行のローブを着、金時計の鎖をみせびらかし、ペルリース (pèlerine, 肩掩の一種) の端をベルトにはさみ、または色柄の小さな肩かけ (fichu) を背中にピンでとめ頸筋を出していた。腕白小僧連はおやじと同じように装い、新しい衣服できゆうくつそうだ。(この日初めて靴をはかせて貰ったという子も少くない。) 初聖体拝領の時の白いローブを今日のために丈をのばして貰った15.6歳の娘もみえる。……髪はバラ香料のポマードで光らせ、手袋を汚すのがいかに心配そうだ。……男の客たちは……それぞれ身分に応じるといふ風にアビ、ルダンゴット、ヴェストやアビ・ヴェスト (habit-veste) という上着といういでたち……。一家中の尊敬を集め、儀式の時しか戸棚を出たことのない自慢のアビ、長裾を風になびかせ、筒型の襟と、袋のような大きなポケットのついたルダンゴット、ひさしに銅の輪をまいた縁無帽と似合いの粗末なラシャのヴェスト、短いアビ・ヴェストは背に二つのボタンが目のように近くつけられ、垂れは大工の斧で裁ち切ったようにみえた。中にはまた (てっきりこういうのは末席に坐らされる連中とみえたが) 一帳羅の仕事着 (blouse de cérémonie) の人もいて、つまり襟を肩へ折り返し、背は小さな襷を寄せ、胸廻りを低く縫いつけたベルトでしめていた。そして皆シューミーズは胸の上に鎧のようにふくらんでいた。刈りたての頭から耳が突き出てみえる。顔も念入りに剃って来た」。かなり長い引用文になったが、田舎の賑やかな結婚披露宴に、人それぞれの雑多な服装が入りまじっている様子がよくわかるのである。

同じ書の中で、二人の結婚後数年を経て、種々の事情からボヴァリ夫妻はヨンヴィルに転居する。その町で県知事を招いて農事共進会が開かれた。村

役場の正面屋上を蔦で飾り、野原には宴会用のテントが張られる。県知事が来て農作物や蓄産で好成績を挙げた農家の人々を表彰する。その情景や人々の様子が次のように描かれている。

「昨日から家をきれいに洗っておいた村の人もあった。三色旗を半開きの窓に出してあった。居酒屋はどこも大繁盛だ。よい天気だったから糊のきいたボンネットや、金の十字架や色柄の肩かけ (fichu) が、雪よりも白くみえ、明るい日ざしに映え、その様々な色どりの男のルダンゴットや青い仕事着 (bourgeron) の地味な単調さをひきたてていた。近在の百姓女は、馬車から下りると、途中で汚さぬようにからげてあったローブの裾の大きなピンを抜いた。亭主たちは、それと逆に帽子を傷めぬように上からハンカチをかぶせその片端を口でくわえていた。」前掲の結婚披露の場面と較べると、仕事着などの日常服が登場するし、また女性が長い丈のローブの裾を汚さぬようにピンでとめるという着方などがわかって興味深い文章である。

この共進会では、何人かの人物が日常とは違う服装をしている。騎兵あがりの徴税役人ビネは、ボヴァリ夫人が旅館の食堂で初めて会った時には「青いルダンゴットを着て、それがやせた体のまわりに真直におちていた。頭の上で垂れを紐で結ぶようになった皮の帽子 (casquette de cuir) から、……秃げた頭をのぞかせている。黒ラシャのジレ、克蘭 (crin、馬毛) のカラー、グレイのパンタロン、年中はいているよく磨いたブーツ……」であった。共進会の日には、ビネは消防隊を指揮して「ふだんよりもっと高いカラーをつけ、制服 (tunique) にしめつけられたこの男の上半身はしゃちこぼって、からだ中で、生きているのは歩調をとって、パツパと上げる二本の足ばかりになったという感じだ<sup>40)</sup>」。また薬剤師オマーも、日常の、「緑色の皮スリッパ (pantoufles de peau vert) をはき、金房つきビロードのボンネットをかぶり、いくらあばたのある顔は、ただ自己満足だけを表わしていた」という姿とは異なる。この日は、黒いアビに南京木綿のパンタロン、ビーバー皮の靴、特に山の低い帽子をかぶっている。しかし、余程貧しい人はいつもと変りがないようにみえる。共進会で表彰された一人の老婆は、「貧しい衣服

(vêtement) の中でしなびてしまったような感じだ。足に大きな木靴 (grosse galoches de bois) をはき、腰のまわりに大きくて青い前かけ (tablier) をしていた。紐飾りのない頭巾 (béguin) に包まれたやせた顔はしなびたリングよりもしわくちゃだった。そして赤いカミソール (camisole) から節くれたち身の皮が厚くなりこわばった長い手がのぞいていた。<sup>42</sup>」カミソールとは、<sup>43</sup>ここではおそらく日常の貧しい上着として着けられたと思う。

以上、地方の町の結婚式や農事共進会など特別の場合の服装をみてきた。前に、バルザックの『老嬢』のなかの、恋心のために身だしなみを整える男性の例をとりあげたが、服飾は、生き方や時々の感情に左右されて変化する。そのような例を挙げてみよう。

『赤と黒』のレーナル夫人は、純真無垢な人妻で、服装には特に気をつかってはいなかったが、「いつか特に目的がないのにお洒落をするのが楽しくなり、時間があると小間使を相手に服の着つけに精を出し、一度はミュルーズから届いたばかりの新しい夏のローブを買うためにヴェリエールに出かけた。……また謝肉祭やヴェリエールでの舞踏会でも、ついぞなかった程、念入りに化粧をし、時には日に2度も3度も着がえをするようになる」。レーナル夫人は、自分で気がつかぬうちに、子供の家庭教師ジュリアンに好意をもち始めていたのである。かつては「あまり身のまわりをかまわない、と夫から叱られていたのに細目の靴下にパリから届いた小粋な小さい靴をはき、また流行の服地で夏服を裁って、大急ぎで小間使に仕立てさせることを楽しみにしている様子」をみて、夫人を訪ねて来て滞在していた親友が驚き、夫人のその他の行動とあわせ考えて、夫人が恋をしていることを感じとるのである。<sup>44</sup>

『ウジェニー・グランデ』のウジェニーも23歳の時、パリに住む従兄が突然に訪ねて来た翌朝、「念入りに肌を整え髪にブラシをあて……靴下も新しいのに替え、靴も一番きれいなのを穿いた。コルセットをきちんかつけた。最後に一段と引きたつて見える姿でありたいと、生れて初めてそんな願いを抱

きながら、仕立てのよい新しいローブを持つことの幸せを思ったが、事実、それを着た彼女は魅惑的であつた<sup>65</sup>」。

これらの例からみると、『赤と黒』のレーナル夫人も、またウジェニーも、純情無垢な女性であるが、自分で気付かぬまま、知らず知らず身を美しく見せるように努めている。恋するという感情が、自然に心も服装もかえてしまっている。次は、違った世界をのぞいたばかりに、本能的に生来もっていた華やかな生活への憧憬や、遊び心が表面化してしまう例である。

ボヴァリ夫人となったエマが、初めは貞淑な妻として家事にいそしみ、家を整理することに喜びを感じていたのに、ある年の秋、侯爵夫妻の夜会と舞踏会に夫と共に招待されて、一日、上流階級の社交場を経験した。彼女にとって初めての夢のようなその思い出が、何時までも心に残る。「富とふれ合ったことで、いつまでも消えない何かが残されてしまった<sup>66</sup>」。その結果、ボヴァリ夫人は、「パリの生活を夢み、婦人雑誌を購読し、パリの夜会や劇場、流行の服飾や家具を知り、バルザックやジョルジュ・サンドを読み、欲望の想像上の満足を求める。自分の衣服や装身具、食事や装飾品にパリ風の洒落た試みをするが、単調な生活の中で、何の出来事も起きない。舞踏会から一年たっても2度と舞踏会はなく、真面目だが鈍重な夫は田舎医者<sup>67</sup>の生活に満足している。そのうち、小説にも楽器にもあき、倦怠感におそわれる。そして、家事は一切かまわなくなり、夫の母が四句節の數日を滞在した時にその変化の大きさに驚く。以前は物を大切に作る上品な趣味だったが、その頃は、數日でも普段着のまま(sans s'habiller)で、グレイの木綿の靴下をはき、氣むずかしくなり、氣まぐれになった<sup>67</sup>」。このような状態のエマは、前述の農事共進会の会場で、ルドルフという、農地や邸をもつ34歳の独身男と知り合い、付き合うようになる。以後、彼への愛情が夫への嫌悪によって強められる。「表面は妻らしく貞淑らしく振舞いつつ、……男のことを思って情念をもやし続けていた。彫金師のように爪をみがき、肌<sup>67</sup>にクリームを塗り、ハンカチにパチョリ香水をふりかける、……腕輪や指輪や頸飾りをつけた。ルドルフが来るはずの時は、青いガラスの大きな花瓶二つにバラを一杯いけ、



主人を待つ愛妾のように、部屋と身なりを飾った。女中は肌着の洗濯にかかりきりだ<sup>49</sup>。そのような内情を知った出入りの雑貨商の男が、言葉巧みにエマの虚栄心をかりたてて、装身具や装飾品、衣服などを売りつける。その結果、恋人のためのお洒落や、恋人への贈物に法外な費用がかかる。物語では、エマは夫にかくれての金策もつき、恋人にも棄てられて、終に自殺に追い込まれてしまう。

いくつかの例でみてきたように、人の集まる晴の場で着飾るほかに、人の心の動きは、お洒落心にも大きく反映するのである。

#### IV

最後に簡単に、中産階級の家庭内の仕事や、衣服にかかわる仕事について多少触れておく。バルザックその他の作品にみられる庶民の女性たちは、自ら家事をこなし、あるいは召使いとともに仕事をする。殊に家事に興味をもち家事をきちんと処理するとか、召使いを上手に管理し、家族を大事にする女性が評価されて書かれている。貴族階級のなかでも、『二人の若妻の手記』のルネや、『谷間の百合』のモルソーフ夫人は、家族を大切に家を守る賢い女性として描かれている。『セザール・ビロトー』のビロトー夫人は、パリ市民階級の典型的な主婦であり、夫や家事に忠実な姿が文中にみられる。ビロトー夫人は「いつも台所と金庫のことばかり心配し、重大なことに心痛するかと思うと、肌着の眼にみえない修繕のことなど気にかけていた<sup>49</sup>。『田舎ミュージズ』のラ・ボードレ夫人は、田舎に住む女性たちの生活について、次のように言う。「ある人たちは、ジャム作りとか、洗濯とか、家のやりくりに、葡萄の収穫といった田舎の楽しみごとに、果実の保存や、肩かけの刺繡、子供の世話や田舎のつまらぬことに飛びこむ<sup>50</sup>」のである。田舎では都会にはない果物の収穫や、それによるジャム作りなど、特有の作業がある。これらの作業は主婦がその使用人たちと共にすることも多いであろう。

吝嗇な葡萄造の主人をもち、生活を極度にきりつめているグランデ家では、

実直な一人の使用人ナノンがすべてをきりもりしている<sup>51</sup>。「食事ごしらえをし、汚れ物の灰汁洗いをし、肌着類をロワール河へ持って行って洗濯し、それを肩にかついで持って帰る。朝は早く起き、夜はふけてから寝る。葡萄の取り入れ時には葡萄摘みの人足みんなの食事の世話をし、摘み残しを拾いとる連中の番をする。忠実な番犬のように主人の財産を守った」。そして、夕食後やひまな時は紡ぎ車で麻糸を紡いでいた。この家では、母と娘のウジェニーが、「下着の仕立てとか、つくろいは一手に引き受け、一日中お針女がするような根気仕事にかかりきりだった。ウジェニーが母親のコルレットに縫いとりでも入れてやりたいなど思う時には、よんどころなく自分の寝る時間をさいて、灯火ほしさに父親の眼をごまかすのだった」。というのは、父親が暖房や調理のための薪や、夜のローソクや、食事の材料などすべて管理していたからである。前述の種々の例や、ここでとりあげた二、三の例から、当時の家事、特に衣服にかかわるものは、糸紡ぎを別として、衣服類の購入や、仕立て、さらに衣類の洗濯や繕いもの、また刺繍仕事などがある。

当時のパリ市民の衣服などの購入経路について、ペローの『衣服のアルケオロジー』の記述から、簡単に要約する<sup>52</sup>。「庶民の出来合の衣服の入手先としての古着商人は、世紀前半まで残っていた。古着は洗濯されたり繕われたり、染め直しされたりして、何度か売買され、ボロボロになると製紙工場に送られたという。19世紀に入ると、男子用の外衣や上着類、シュミーズ、女子用の小物類などが予め仕立てられて売られる店ができた。1820年代に手仕事の分担により製造工程を合理化して労働者用の作業着やパンタロン、市民用の一般服を製造し、古着に近い安価で販売する店がふえる。1840年代には既製服の本格的生産が始まり、ややおくれて、市民の女子用既製服も販売されるようになる」。しかし、これらの既製服と、従来の専門店の仕立服とは全く衣服としての価値が違っていたことはいうまでもない。そして、パリ以外の各地でも多かれ少かれこのような状況であったと思われる。

当時のモード雑誌には、記事として多くの店が紹介され、衣服の専門店の場合、季節毎の新着の生地や、新しいデザインのローブやルダンゴット、ジ

レなどについて細かく説明されている。帽子屋には新しい帽子や髪飾りが、小物店にはシュミーズやショールやクラヴァット、手袋などがある。パリの洒落者や上流階級の人々は、それら名の通った店の品々を揃えたいらしい。ペローによると1840年に「パリの男子服仕立店が3,000軒あり、うち200軒が優良<sup>63</sup>、5~600がまあまあ、残りは劣悪」という。モード誌に紹介されるのは極く優良な店であろう。従って同じ仕立代にも格段の差がある。バルザックの作品には、モード誌にみる実在の店の名前が屢々引用されている。女性服仕立師ヴィクトリーヌとか、紳士服仕立師ストーブ、小物店ヴェルディン等々で、それはペローの解釈では、「バルザックがこの種の狡猾な宣伝が巧みで、それにより何か利益をひき出そうとしたため<sup>64</sup>」であるという。中産階級やそれ以下の人々はそれなりの店や市場で買物をする。バルザックの作品の中にこの種の店の情景も時々見られる。そのひとつ、『セザール・ピロトー』では、ピロトーが小間物・化粧品店の女店員頭のコンスタンス（のちの妻）を見染める。物語では1799年頃、「この店はしばらく前からパリに現われ始めたような店で、彩色した看板、風にひるがえる旗、ショールをブランコのように張りわたした陳列窓、カルタの城のように並べたクラヴァット、そのほかいろんな目をひくような多くの品物、正札、飾紐、ポスター等々<sup>65</sup>」があり、当時としては先駆的な店だったという。この店でコンスタンスと長く話したいために、値段の駆け引きをして、ピロトーは仕方なく麻のシュミーズ半ダースを買う。数日後にはまたその店でハンカチを買う。この種の店では、外交員を使って、地方の販売に力を入れるところもあるようで、「帽子とパリ製の小物を専門にする商売上手な外交員」の話もでてくる。彼はいろいろな店の商品の販売を引受け、地方の多くの商店になじみをもっているという<sup>66</sup>。市民の娘たちがこの種の店の女店員や仕立女として働いていた。物語では、ピロトーの娘は父親が破産したあと、「イタリア通り（ファッション店の多い通り）に近い新築のパリの流行品を販売する最も豊かな店に、食料と宿泊つき1000エキユの地位を得る<sup>67</sup>」。地方にも同種の店は多い。『老嬢』には、アラソソンのある婦人服店は「不具の姉妹二人がやっているが、仲々趣味もよ

く、ローブも帽子もレースもリボンも仕立てた」と書かれている。<sup>64</sup>

専門店で仕立てる以外に、日常着や肌着類は、上流家庭では、お針女たちを備って仕事をさせていたようである。中流やそれ以下では、主婦や娘が、下女と共に、あるいは主婦ひとりで仕事をしている様子が、前掲の文章その他からも読みとれる。ユロ男爵家の娘も父親の放蕩により家の収入が危機に直面した時には「お針女の日当を検約するため、繕いものなどをした」と書かれている。また『ピエレット』によると、ログロン姉弟は、1829年、親せきの少女をひきとることになったが、自分の虚栄心から、近所の人の手前、少女に見劣りしない服装をさせようと、仕立屋に仮縫いをさせたり、何人かのお針子を備ってペチコートや肌着を仕立てさせた<sup>65</sup>。中流家庭でも人を備って縫物をさせていたということがわかるが、当時、お針子たちの給料は大変安いので、このようなことが多かったのであろう。それでも、前述のグラデ家の母娘のように一切を自分たちで引きうけて家計を節約したり、ユロ家の娘のように本来なら思いもよらぬ境遇に育ちながら、経費節約のために自ら繕いものをすることもある。貧乏だが、きちんとした身なりをしようとする田舎の娘たちは、いろいろ工夫しているようで、『農民』に次のような文章がある。彼女たちは「上品にできている衣服の下に、この辺の一番裕福な農婦が着ている下着より、もっと上等のものを着込んでいた。お祭りでもあると、どんな手段で買い求めるのか知らないが、きれいにおめかしをする。貴族の館の召使いたちがパリの小間使い向きの衣服を売り払うのを、丁度の寸法に仕立直して着ている<sup>66</sup>」。バルザックの何気ない文章の中に、当時の衣生活の一端がうかがえる。女性たちは小まめに針をもち、衣服の手直しや繕い、さらに刺繡をしていた。『老嬢』にはアランソンのコルモン嬢の恒例の夜会に集まる人々にまじり、「婦人たちの中には編物や刺繡のような手仕事を携えて来るものがある。若い娘たちの中には平気でアランソン・レースの模様書をやっているものがある。それで自分たちの衣服費の助けとしているのだ<sup>67</sup>」。

衣服を扱う上での大事なことに洗たくがある。『ゴリオ爺さん』のなかに、ダンディの服装の条件のひとつとして、衣服の清潔さが挙げられ、特にシュミーズは真白であることが大切で、そのため年間の洗濯費として2000フラン必要と書かれている。『老嬢』の中の年輩の洒落者も、肌着やシュミーズの白さを心がけている。そして一方『あら皮』の主人公の貧しい青年は、「極端に節約した生活のために「室代一日3スー、一晩に3スーの割で油を燃し、洗濯代を一日2スーですますためにフランネルのシャツを着た」という。<sup>63</sup>

松本氏は「文芸作品にあらわれた洗濯」の中で、「フランス洗濯史話」と題し、特に19世紀の洗濯や洗濯婦に関し、ユゴーの『レ・ミゼラブル』、ゾラの『居酒屋』<sup>64</sup>とともにバルザックの『老嬢』からも引用している。『老嬢』は主要人物の一人、年輩の洒落者が洗濯屋に下宿している設定なので、洗濯女や、洗濯干し場について書かれている。ゾラの『居酒屋』はまさに洗濯女の一生を書いてあるが、パリの町の公共の立派な洗濯場に集まる洗濯女たちや、貧しい主婦たちの姿、洗濯場の設備や洗濯方法、洗濯屋の様子などが細かく描かれている。しかしこの作品は1870年代のものであるから、19世紀前半と少し違うのであろう。今回とりあげたバルザックやスタンダール等の作品には、洗濯場の描写はない。当時パリでは水が不便で、多くの家では洗濯屋に依頼することも多かったであろう。郊外や田舎では川での洗濯が多く、前掲のグランデ家の召使いは近くの川で洗濯をしている。『老嬢』にみられる洗濯物は中庭の「馬の毛(crin)でできた綱に干されている。それらは「刺繍したハンカチ、コルレット(女子の襟飾り)、カネズー(canezou、短い上着)、カフス(manchettes)、ジャボつきシュミーズ、クラヴァット、レース類、縁取りのあるローブや、この市の良家の上等の下着類」である。普段は洗濯屋の中庭に干してあるが、冬には屋根裏の部屋を干場にしたという。<sup>65</sup>

洗濯やその他の衣生活にかかわる状況については、さらに詳しく書きたいが、今回は紙数の都合で、内容の一部の紹介にとどめる。

以上、19世紀前半の文学作品から、庶民の服飾を中心にみて来た。それに

よると、パリの市民は、流行を気にする貴族や洒落者と異り、その服装は流行おくれや、一時代前のものが多く、たとえ新しくとも素材と仕立ての違いが目につく。地方では、上流階級の人々でもパリ市民に共通するところがある。このことは単に流行に無関心で身なりを構わないというばかりではなく、経済的な事情もあるらしい。特に地方では生活費がパリと全く違うところから、経済感覚も自ら異つてくると考えられる。さらに地方の農民の服装には、ヴェストやカミソール、ブルジュロンなど、モード誌には全くその名を見ない衣服がある。

そして市民は、晴の場では、ここぞとばかり着飾るところが、社交界の人々と違うのであるが、バルザックによれば、市民のお洒落の仕方は巧みではない。また人々のお洒落心は、晴の場で発揮されるばかりではなく、恋心をもつと、本人は気付かぬうちに身なりや化粧に気をつけている。それは『赤と黒』のレーナル夫人も、ウジェニー・グランデも、ボヴァリ夫人にも共通しており、人の心が服装に大いに反映する様子を、三人の作家がそれぞれ描いているのである。

#### 註

- (1) バルザック『人間喜劇序』中島健蔵訳、『風俗のパロロジー』山田登世子訳より抜すい
- (2) Daneiell DUPUIS, "Toilette Feminine et Realisme Balzacien" L'année balzacienne, 1986, Paris R. U. F.
- (3) 拙著『ヨーロッパ服飾史』朝倉書店, 1991。第5章第2節モード誌にみる男子服参照。(アビとフラックは燕尾のある上着。ルダンゴットは胸に切替のある丈長の上着, 前世紀は外衣として用いられた。キュロットは革命以前の下半身着で膝たけ。パンタロンは, 革命後, 市民服として登場した長ズボン。ジレは袖無しベスト。クラヴァットは現在のネクタイの前身)
- (4) 拙稿『人間喜劇にみられる服飾描写, 一パリの若者を中心に一』学習院女子短大紀要22号, 1984。
- (5) バルザック『セザール・ピロトー』(1837) 新庄嘉章訳, 東京創元社バルザック全集10巻51頁。Balzac, "Cezar Birotteau", Folio 版 p.91.
- (6) バルザック『幻滅』(1835-43) 生島遼一訳, 東京創元社バルザック全集11巻,

- 139頁, Balzac, “Illusions Perdues” Garnier 版 p.176.
- (7) 『セザール・ピロトー』前掲書, 137頁。Folio 版 p.208.
- (8) 同上 88-91頁。 同上 p.143-146.
- (9) 同上 114頁。 同上 p.177-178.
- (10) 『幻滅』前掲書, 171頁。Garnier 版 p.219.
- (11) 『タブロー・ド・パリ』ジャン, アンリ, マルレ絵, ギョーム・ド, ベルチェ文  
鹿島茂訳, 新評論社, 1984。
- (12) スペンサー (spencer); M.Leloir によると, 19世紀初め, 立襟, 長袖, 胴文  
の女子用ヴェストであったが, 男子服にも登場, 高い折返し襟つきの短かい上  
着でアビの上に着けられた。(M.Leloir, Dictionnaire du Costume 1951.)
- (13) バルザック 『いとこポンス』(1847) 水野亮訳, バルザック全集20巻, 6-7頁,  
Balzac, “Le Cousin Pons” Garnier 版 p.6-8.
- (14) バルザック 『いとこベット』(1846) 水野亮訳, バルザック全集17巻, 362頁,  
Balzac, “Cousine Bette” Garnier 版 p.355.
- (15) バルザック 『ゴリオ爺さん』(1834) 小西茂也訳, バルザック全集8巻, 14頁,  
Balzac, “Le Père Goriot” Garnier 版 p.18.
- (16) 『ゴリオ爺さん』前掲書, 17頁。Garnier 版 p.22.
- (17) 『いとこベット』前掲書, 10頁。Garnier 版 p.3.
- (18) 同上 333頁。同上 p.325.
- (19) 同上 330頁。同上 p.323.
- (20) 『ゴリオ爺さん』前掲書, 14頁。Garnier 版 p.18.
- (21) 『セザール・ピロトー』前掲書, 142-144頁。Folio 版 p.214-218.
- (22) 同上 146頁。Folio 版 p.221.
- (23) バルザック 『老嬢』(1836) 小林正訳, バルザック全集8巻, 247-275頁より抜  
すい。Balzac, “La Vieille Femme” Folio 版 p.27-69.
- (24) バルザック 『ウジェニー・グランデ』(1833) 水野亮訳, バルザック全集5巻  
29-31頁。Balzac, “Eugénie Garndet” Garnier 版 p.42-45.
- (25) 『幻滅』前掲書, 45頁。Garnier 版 p.55.
- (26) 同上 68頁。同上 p.84.
- (27) 同上 69頁。同上 p.85.
- (28) 同上 69頁。同上 p.86.
- (29) 同上 71頁。同上 p.89.
- (30) バルザック 『いなかミューズ』(1843) 西岡範明訳, 29頁。
- (31) スタンダール 『赤と黒』(1830) 小林正訳, 新潮文庫, 下巻27頁。

- Sterdhal, “Le Rouge et le Noire” Garnier 版 p. 231.
- 32 『ウジェニー・グランデ』前掲書, 15頁。Garnier 版 p. 20.
- 33 『セザール・ピロトー』前掲書, 28頁。Folio 版 p. 58.
- 34 『赤と黒』前掲書, 上巻40頁。Garnier 版 p. 26.
- 35 同上 46-48頁。同上 p. 30-31.
- 36 J. Charles-Roux, “Le Costume en Province” (1907,) LAFFITE REPRINT, Marseille, 1977, p. 27.
- 37 フローベル『ボヴァリ夫人』(1851-56) 生島遼一訳, 新潮文庫, 34-35頁。  
Flaubert, “Madame Bovary” Folio 版 p. 52-53.
- 38 同上 161頁。 Folio 版 p. 183-184.
- 39 同上 90頁。 同上 p. 114.
- 40 同上 161頁。 同上 p. 183.
- 41 同上 162頁。 同上 p. 184-185,
- 42 同上 186-187頁。 同上 p. 204.
- 43 カミソール (Camisole) とは, 17世紀には男子用の木綿の短かい袖つきの衣服で, シュミーズの上, プールポアン(当時の上着)の下に着けた。だがのちに女性の下着や寝間着のことをいう。(M. Leloir, Dictionnaire du Costume, 1951)
- 44 『赤と黒』前掲書上巻, 74-75頁。Garnier 版 p. 48.
- 45 『ウジェニー・グランデ』前掲書, 52頁。Garnier 版 p. 79.
- 46 『ボヴァリ夫人』前掲書, 69頁。Folio 版 p. 91,
- 47 同上 70-78頁。同上 p. 92-101.
- 48 同上 233頁。同上 p. 249.
- 49 『セザール・ピロトー』前掲書, 34頁。Folio 版 p. 67.
- 50 『いなかミューズ』前掲書, 39頁。
- 51 『ウジェニー・グランデ』前掲書。20-23頁。Garnier 版 p. 29-33.
- 52 『衣服のアルケオロジ』フィリップ・ペロー著, 大矢タカヤス訳, 77-80頁, 文化出版局, 1985。
- 53 同上 59頁。
- 54 同上 61頁。
- 55 『セザールピロトー』前掲書, 33頁。Folio 版 p. 66.
- 56 同上 106-108頁。同上 p. 166-169.
- 57 同上 242頁。同上 p. 345.
- 58 『老嬢』前掲書, 292頁, Folio 版, 95頁。
- 59 『いとこベット』前掲書, 226頁。Garnier 版 p. 220.



- 60 パルザック 『ピエレット』(1840)原政夫訳, パルザック全集 4 巻, 272-277頁。
- 61 パルザック 『農民』(1844-1855) 水野亮訳, パルザック全集, 18巻, 52頁。
- 62 『老嬢』前掲書, 283頁。Folio 版, p. 81。
- 63 パルザック 『あら皮』(1831) 山内義雄・鈴木健郎訳, パルザック全集 3巻, 74頁。
- 64 『洗濯の科学』27巻, 3号, 4号(1982)
- 65 『老嬢』前掲書, 253頁, Folio 版 p. 36.
- 66 bourgeron は, 農夫や労働者が着けていた平織の麻織物の blouse (M. Leloir, Dictionnaire du Costume)。
- 67 当時のフランスの貨幣  
1 エキュ = 3 フラン, 1 フラン = 20 スー, 1 スー = 5 サンチーム。  
なお, 『マクミラン世界歴史統計(1)』によると, フランスの1820年代 30年代の  
卸売物価指数に大きな変化がないので, 貨幣価値の差も殆どないと思う。

(すがわら たまこ 本学教授・家庭生活科服飾研究室)